

反戦詩人エズラ・パウンド： 最もアメリカを愛し批判した者

渡 辺 信 二

ほんとうに「反戦」詩人なのか。

エズラ・パウンドを「反戦詩人」と再評価するには、あまりに彼の主張は、偏向した反民主主義だった。彼は、20世紀最高の詩人のひとりとして高く評価される反面、ファシストを支持し反ユダヤ主義を唱えた愚かな狂人と見なされても致し方なかった。だが、戦争へ反対し、アメリカの第2次世界大戦参戦に反対したことも事実である。彼の政治的、経済的な主張は、唾棄すべきものとして一蹴され、また、軽蔑されてきた。彼の詩作品もまた、そうした政治的、経済的な主張から生まれたので、評価の際に、ディレンマに直面する。しかし、彼のいくつかの主張は興味深く、とりわけ、アメリカという国やアメリカ民主主義への疑問が湧いている昨今、彼の主張を再確認することは意味あることだろう。

いくらアメリカが大義や証拠や自衛権などを振りかざそうと、2001年の9/11事件以後、同年10月7日の対アフガン爆撃とタリバン政権の転覆、2003年のイラクへの軍事行動とフセイン政権崩壊について、心あるものは納得しない。むしろ、トクヴィルの指摘を思い出す。すなわち、「すべての軍隊のうちで、戦争を最も熱心に願う軍隊が民主的な軍隊である」（トクヴィル下473

頁) 実際、ブッシュ大統領やブレア首相は、大量破壊兵器が存在しなかったのに、イラク戦争を最も熱心に遂行した。しかも、後になって証拠がなかったと誤りを認めたが、謝罪せず、英米や世界にとって脅威であった独裁政権を倒し、民主主義を広めるのは正しいと強弁した。

現代社会で戦争を仕掛ける国として、アメリカに次いでイスラエルの名がよくあがる。この国は、アメリカに強く支持され、2006年夏にもレバノン空爆と侵攻を行った。パレスチナ国家への武力侵攻も繰返される。ただし、長い歴史が背景にあるので、正邪を直ちに断ずることは控える。第2次世界大戦中にパウンドは、イタリアからアメリカ国民とイギリス国民に向けて、「反逆的な」ラジオ放送を英語で行った。1941年1月から43年7月まで続いたが、78年になって初めて、放送の概要が本として発刊されている。それが、『エズラ・パウンドが語る——第2次世界大戦ラジオ講話』(“Ezra Pound Speaking” — *Radio Speeches of World War II*。以下、ESPと略記)である。この小論は、この本をもとに、彼の詩作品と関連させながら、パウンドの反戦の姿勢とその根拠の確認と評価を試みる。

1 愛国者としてのパウンド

パウンドは、最も激しいアメリカの愛国者であり、アメリカの国家主義者であった。彼の発想の根本には、アメリカの文化と歴史への思いが有る。ラジオ放送において、パウンドは自らを「アメリカ人である」と明言したことをまず、銘記すべきだろう。たとえば、1942年1月29日の放送のあと、ローマ放送は以下のように声明を出している。

ラジオローマは、ファシストの政策である知的自由と言論の自由に従って、エズラ・パウンド博士に週2回マイクを提供することとなった。彼は、自分の良心に反することや、アメリカ合衆国市民としての義務に相容れないことを言うように強制されることはない。(EPS xiii)

これは実は、パウンドの書いた草稿に基づく声明であった。ラジオで述べる内容について、パウンドは、「一人のアメリカ市民」(EPS 80)として、厳密な情報を提供するのであり、アメリカの伝統に資すると確信していた。彼は、ファシズムの宣伝者であるとの非難に対して、「わたしはとりわけアメ

リカの、北アメリカの、そして、合衆国の伝統を弁護している。これらの話にひとつでもアメリカ合衆国憲法に反することがあるというなら、それが何か知りたいものだ。・・・」(EPS 393)と答えている。しかし、事実が必ずしも真実ではない。事実で「真実」の虚構も可能である。彼は「真実」と思う事柄を事実に基づき主張し、その代償を払った。パウンドは、『ピサ詩篇』冒頭部に「放送の自由の無い言論の自由などゼロに等しい」(『ピサ詩篇』3頁)の一行を挿む。その主張は正しいが、パウンドが正しいとは言えない。彼を政治的に守る術はない。司法省は既にFBIを通して1942年4月からパウンドに関する捜査を開始した。そして、1943年2月には、反逆罪で裁かれるべき者6名のリストに、パウンドの名を上げた。("Worst Best")

言論の自由が民主主義の根本のひとつだとすれば、アメリカの民主主義がご都合主義に変わってしまったということも出来よう。しかし、もしもそうだとすると、それは、いつからなのか。実は、ホイットマンが既に『民主主義展望』で見抜いていたのではないだろうか。「現実には依然として奇怪だ。・・・(「新世界」の民主主義の)社会的な様相、および、宗教的・道徳的・文藝的美学的成果に於いては、今のところほとんど完全な失敗だ」(ホイットマン17頁)と述べるホイットマンは、パウンドのいわば文学的な先輩である。共にアメリカの民主主義を信じ、その実現を強く求めた。その理念の中心に、ホイットマンは、霊と文学をおき、パウンドは、美と孔子を置いた。共に、フマニタス、人文主義、人間中心主義である。しかし、人間の歴史を進歩主義で捉えるのか、それとも、墮落の歴史と捉えるのかで大いに違う。ホイットマンは、未来をこれから来るべきユートピアとしたが、パウンドは、いわば過去のアルカディアを蘇らせるべきものとして未来を考えた。

ホイットマンはただに、未来を信じ、進歩を信じ、アメリカを信じた。そして、その中心が「文学」であった。次の引用には、理想化された「文学」が民主主義的な指導者となる希望を明示している。

独立200年祭【1883年】がくるよりずっと前に、約四五十の大きな州が(カナダもキューバも含めて)できようとしている。現世紀の終わる頃には、わが国の人口は六七千万になっているだろう。太平洋はわれらのものとなり、大西洋も主としてわれらのものとなろう。地球のあらゆる部分と、毎日電信の通信を交わすだろう。何という時代！ 何という国土！ 他のどこに、このような偉大なものがあるか？ その時になっても、従来常にあったが如く、

一つの国民の個性が、世界を指導すべきだ。誰がその指導者であるべきかについて、疑問がありうるであろうか？ しかし、銘記せよ、最も偉大な独創的な、誰人にも服従しない「霊」でない限りは、真実、みごとな指導をしたものはなく、否、単に指導することさえできぬのである。この「霊」——その別名は、この『展望』では「文学」というのである。(ホイットマン82-83頁)

ホイットマンは、当時のアメリカ拡大主義、汎アメリカナ的発想を受け入れながら、その中心的な指導理念を「文学」とする。文学が民主主義を体現し、擁護し、指導するような<文学王国>を夢見ている。そのホイットマンの考えにおいてもっとも大切な理念は、<同志愛>である。上記引用のすぐ後に、次のように言う。

烈しくそして優しい同志愛、人間と人間との個人的な熱情的な愛着——それは明確に掴むことは困難だが、あらゆる国家と時代の偉大な救済者たちの教訓と理想の基底をなすものであり、それが風俗や文学のなかに充分に展開され養成され認識される時には、我が合衆国の未来に対する最も実質的な希望となり安全の保障となる、——その同志愛の完全に表現されるのも、その数百年後のアメリカだ。(ホイットマン83頁)

<同志愛>は、実は、アメリカ文学の最高傑作『草の葉』でも繰り返しうたわれていた。ホイットマンは、まさしく、「数百年後のアメリカ」に未来を託した。

パウンドはホイットマンと違って、大衆を信じない。大衆が芸術を解さないからである。「芸術家は民族のアンテナであるが、丸頭の多数は偉大なる芸術家を信頼しようとはしない。」しかし、パウンドもまた、現実のことが何も分からなかったと、今になれば言えるだろう。盲目的に「仁」と「愛」と「美」を信じ、アメリカを信じた。

2 戦争そのものへの反対

もともと、アメリカン・モダニズムにとって、詩作品や詩人たちこそが偉大なのであり、それに比して、文学を理解しない者はなんらの存在価値もな

かったので、賢人政治や偉大な指導者の独裁には抵抗がない。パウンドは、ダグラスの社会信用論（SocialCredit）に魅かれ、また、一方で孔子の「仁」による政治に魅かれ、社会改革を目指そうとした。この改革の担い手として、パウンドは、ファシズムを選んだ。なぜファシズムなのか、また、いかにして秘義的な神秘論と社会信用論とファシズム、そして、孔子の教えがパウンドのなかで結びついたのかについては、三宅昭良の2本の論文が示唆に富む。

以下、2つのウェブサイト（"FMTP"と"Wikipedia"）をもとに説明すると、ダグラス(1879-1952)は、不況を回避するには、国家が国民に対して「信用」を供与して、国民の購買力を活性化する必要があった。この「信用」の根拠は、無数の人々の努力によって築き上げられた文化や文明がもたらしている利益である。その利益の「配当」として「信用」が国民に与えられるべきだと主張し、彼は、のちにその「信用」を「社会信用（ソーシャル・クレジット）」と呼んだ。ダグラスは、資本主義経済では製品は過剰に生産され、それが輸出によって解決されようとするために国際間の紛争が起こるというイギリスの経済学者J・A・ホブソンの考え方にも共感を表明し、戦争を防止するためにも国内の購買力を高める必要があるとした。ダグラスの理論は、かなり一面的な議論であるらしいが、ただ、広い意味での通貨供給によって経済運営を行うという主張に読み換えるなら、議論としては時代を先取りしていたと言えよう。

パウンドは、『キャントーズ』第45の歌で、利子制度のことをいわば美しく批判した。

利子ではだれも美しい石の家をもつことはない
ひとつずつきれいにぴたりと切られて
模様が表面を飾る石の家を
利子では
だれも自分の協会の壁に彩られた天国をもつことはない

（『パウンド詩集』182頁）

パウンドは、真珠湾奇襲攻撃が行われ、太平洋戦争が始まったまさにその日に、アメリカの参戦を非難した。「わたしは、サスーンや他の英国系ユダヤ人たちがシンガポールや上海で行なう闇商売を続けさせるために、20代

から40代の同胞たちが殺されに行ってもらいたくない。」(EPS 21) このサスーンとは、デイヴィッド・サスーン (1792-1864) とその後裔を指す。彼は、12世紀以来、メソポタミアの支配者たちにお金を融通してきたバグダッド・ユダヤの家に生まれたが、ムスリム・トルコの圧迫を避けて、1833年ボンベイに家族とともに移り、そこで中国におけるアヘン独占貿易権を含む交易業を展開した。当時の中国は、アヘンを禁止していたので、清朝皇帝道光帝によって1838年広東に派遣された林則徐は、アヘン箱を全て没収し処分した。これに怒ったイギリスは、最終的にアヘン戦争を仕掛けて完全な勝利を得、中国全土においてアヘン貿易を合法化させた。1850年ごろには、陸海いずれにしろ動く品物には全て、「サスーン」の手を通るかその商号が付けられていたという。サスーンの息子のひとりアブダラは、名前もアルバートと変えて英国に移住し准男爵となり、やはりユダヤ系の巨大な国際金融資本ロスチャイルド家と婚姻関係を結んだ。(『ウィキペディア』)

こうして、パウンドは戦争を憎んだ。そして、ユダヤ人を憎んだ。

戦争は、国家や国民にとって破壊的であるが、特別な利害を持つ者にとっては利益があがる。その意図の善悪を問わず、結果として、戦争遂行を財政的に支えた人たちは見返りに莫大な利益や利権を獲得しているし、そのなかにユダヤ人財閥が確かにいる。だが、忘れてならないことは、「正しい戦争」などは存在しないということだ。

軍隊によって征服し

力だけが正義である者たちに災いあれ (『ピサ詩篇』 77頁)

テントの頭の影が四隅の杭の上を歩みつづける

時を刻んで。月が欠け、ルッカより手前には雲一つない。

春秋の時代

『春秋』に

義
戦
な
し

(『ピサ詩篇』 116頁)

「正しい戦争」などは存在しない、たしかに。

そして、第2次世界大戦の犠牲者で最も悲惨な目に遭った民族のひとつが、ユダヤ人である。ただし、ただし、田中宇によれば、その規模や方法については現在、議論があると聞く。（「ホロコーストをめぐる戦い」）

経済的な自由無しに、自由は存在しない。負債からの自由を含まない自由は、ただの戯言である。そうした状態は奴隷状態であり、これをなお自由と呼べば、臭くて汚い定義争いである。そう、高利貸しの負債を含めてあらゆる負債からの自由こそが最も大切である。（EPS 226）

パウンドは、利子制度こそが、歴史上、あらゆる戦争の原因であり、利子制度の理解が、歴史理解の中心であると断言する。

かれらはみな私欲のために民衆から絞りとった 魅惑したのだ
割引を取り扱う銀行はまさに不法行為だ

私欲のために民衆から絞りとるから （『ピサ詩篇』24-25頁）

パウンドが繰り返し主張するところによれば、「誰が誰にお金を貸しているのか知らなければ、歴史を知ったことにはならないし、国際的な対立の根を理解することも出来ない。（EPS 382）

それに利子だ、60パーセントとか

無から生じたものを貸すことだ

国も金を貸すことができる 昔アテネで

サラミスの船隊を建造したときのように

そして、もしその資金が運用の途中で消えたら、

チャーチルの支援者に聞け

きっとかれらの許に流れたのだ

（『ピサ詩篇』32頁）

利子制度は国家に何の利益ももたらさない。「文明化された者たちに残酷さを投げつけるのが、高利貸のゲームである。」（EPS 319）「この戦争（=第2次世界大戦）は、1939年に始まったわけではないし、（第1次世界大戦を処理した1919年の）悪名高きヴェルサイユ条約のみによる結果でもなかった。この戦争は、以前から続く高利貸と他の人々との戦いであった。高利貸と農

夫、高利貸と生産者、高利貸と商人、高利貸官僚制度と商業主義都の戦いだ
った」(EPS 259)とパウンドは主張する。

現在の戦争は少なくとも、17世紀末のイングランド銀行設立にまでさかのぼる。イングランド銀行は、現在、英国中央銀行として、イングランドとウェールズにおける通貨発行権を持ち、外国為替と金準備を管理し、政府の証券(国債)を登録する。このように、政府の銀行であると共に「最後の貸手」として銀行の銀行である、もともとは、当時の政府へ1.2百万ポンドの融資を行うことと引き換えに、紙幣発行権を含むさまざまな銀行業の特権を得たことが始まりであった。(EPS 259)

パウンドは、歴史的な事実としてあまり大きく取り上げられはしないが、ペンシルヴェニア植民地が紙幣を発行することをロンドンの「高利貸官僚制度」が1750年に禁じたことが、1775年の独立革命の主要な原因であると考え、繰り返し、強調している。(EPS 29, 153, 259, 390)

こうして、かなり偏頗な主張であるが、第2次世界大戦は、ユダヤ商人と高利貸制度に犯されたイギリスが始めた戦争であり、日本を戦争に追い込んだのも、イギリスだと考えている。

3 アメリカ参戦への批判

パウンドの考えによれば、アメリカ合衆国は、ヨーロッパの戦争に参加してはならない。アメリカが外国に介入する理由はない。「アメリカの伝統を維持すべき場所はアメリカ大陸である。独立戦争時に、ヴァリーフォージで越冬し苦難を耐えたのは、決して、他国の戦争を煽って軍需品を売ろうとするためではなかった」(EPS 44)

ここでパウンドが言うところのアメリカの伝統とは何か。

それは、北米の地に、他のどこよりも優れた政府を設立し維持することであった。地上の他のあらゆる国家よりも優れて、われわれ自身を国として統治しようとする決意であった。ワシントン、ジェファソン、モンローと続く、他国のいざこざには加わらない態度であった。(EPS 30)

オマハからシンガポールへ少年たちを送ってイギリスの独占と残虐行為のために死なせるのは、アメリカの愛国主義に反する。(EPS 42-43)

なぜ、こいつらギャングと仲良くするんだ？ こいつらとは、ロンドンのユダヤ人たちとモスクワのユダヤ殺人者集団のことだが。(EPS 54)

アメリカの伝統を守るべき場所は、アメリカ大陸である。(EPS 80)

アメリカ人たちには介入する権利がない。ヨーロッパについて、地獄についてくらい深く計り知れないほどの無知なのだから。(EPS 170)

ポンドは、戦争の根本原因を高利貸制度に見るので、第2次世界大戦は、じぶんのこれまでの主張を裏付けるだけでなく、更に悲惨な結果をもたらすに違いない戦争であった。「イギリス、ロシア、アメリカ3国の関心と利害と利益は、金、高利、負債、独占、階級利益であり、人間性への甚だしい無関心と侮蔑であった。」(EPS 48-49) 金が世界各国の争いの根本であるが、「金は臆病であり、危険が少しでも感じられるならその国から逃げ出すであろう」(EPS 55) 真の敵は、国際金融資本主義である。「至る所であらゆる人々が犠牲になっている。しかし、実際には、それは国際ではない。国家を超えるものでもない。むしろ、半国家的であり、国家の底に流れ、国家を破壊し、法や政府を破壊してゆく。20年前にはロシア帝国やオーストリアが、昨日はフランスが、そして、今日はイギリスが破壊される。」(EPS 55)

イギリスがドイツと戦う戦争に、なぜアメリカが参加しなければならないのか。ポンドによれば、チャーチルが戦っているのは、「金本位制と独占のため」(EPS 7) だし、この戦争の勝利者は、どこの国でもなくて、ビッグマネー＝巨大金融である。

利子制度が地球をダメにしている。これは、すべての人々にとって危険な病気である。自分のところのスラムを見ても良い。利子制度はイギリスの何百万もの貧民を破滅させ、インドでも何百万人に悲惨をもたらしている。・・・遊牧民のような寄生動物(＝ビッグマネー)は、ロンドンから出てマンハッタンへ移動するだろう。これは国家主義的なスローガンに隠れて行われる。すなわち、アメリカの勝利だと。しかし、アメリカの勝利である

はずがない。事態は深刻、かつ、複雑だ。なぜなら、現在、2つの現象が同時に進行しているためだ。すなわち、現在の戦争を戦おうとするものと、次の戦争の種をまこうとするものが共存している。(EPS 319)

確かに、第2次世界大戦が終わっても、冷戦を含めて戦争は尽きない。「次の戦争の種」を予見したパウンドは、じぶんの正しさに臍を噛んだことであろう。

負債や利子制度への防波堤が、アメリカ合衆国憲法であった。これこそは、世界最良のものであり、社会正義を実現するのに最も効果あるものであったはずだ。(EPS 19) 本来のアメリカの歴史は、不正で高利貸的で独占的な政府、すなわち、イギリス政府、が植民地人たちによって追い出されたという歴史である。また、アメリカの輝かしい伝統は、歴代の大統領が「ユダ公たちの高利貸と闘ってきた。」(EPS 121) ことである。

アメリカはギャングだって、女子供を撃ったりしない。時には誤ったことがあるかもしれないが、しかし、基本は、自分にかかなり危険が有ろうとも自分よりも強い権力と戦うのが常であった。爆弾をいたいけない子供たちに落としたりはしない。(EPS 370)

アメリカ参戦前後の重大な問題のひとつが、報道操作にあるとパウンドは考えていた。「わたしはアメリカ発のニュースは信じない。取材源は信用できないと知りながら、嘘の塊りのなかを手探りで捜すようなものだ」(EPS 113)「アメリカ合衆国は、誤った情報が与えられている。誰がこの戦争を起こし、誰がこの戦争を欲し、いったい誰がふざけ回って戦争を起こして戦争を続けさせ、拡大させているのか。」(EPS 24)

パウンドが放送で繰り返し言っていたのは、知ることの大切さであった。「獣のように死ぬな。大西洋や太平洋の真ん中で死ぬとか、砂漠で焦がれ死ぬとかだとしても、なぜそうなるのかは知っておくべきだろう。なぜ死ぬのかを知らずに死ぬのは獣のように死ぬことだ。人らしく死ぬためには、なぜ、そういうことになるのかを知っているべきだろう」(EPS 409)

パウンドは、ときおり苛立たしげにアメリカ国民を非難する。

あなた方は何のために戦争しているのか。ヨーロッパを飢餓にするため

か。アジアに飢饉を広げるためか。すぐに嘘だと分かる馬鹿げた誇りのためか。サスーンたちのためか。国家の伝統のために戦っているか。知恵の遺産、ワシントンの、モンローの、ジョン・アダムズの、あるいは、リンカーンの遺産のためなのか。

そうじゃない、とわたしは言うておく。

あなたがたは、こうした大統領たちが守ろうとしたものと正反対のもののために戦争している。これを奇麗に止めさせることは、わたしの手に余る。

アメリカの伝統のためにヨーロッパから語るエズラ・パウンドでした。
(EPS 77)

彼は、アメリカが自国憲法の本来の精神を忘れ、自己革新の動きが失われて軍国主義に犯される事態を嘆く。「この独房のうえに轉るひばりのように喧しく／軍国主義が西へ侵攻している／「西部戦線異常なし」／それに憲法も危うくなり／世の中の成り行きもことごとく新しいものがない／「サファイアで作られた——、この石は眠りを与える」(『ピサ詩篇』4頁)ここでの「西」とは、ヨーロッパから大西洋を越えたアメリカを指す。

4 パウンドの主張への評価

果してパウンドは何のために反戦を唱えたのであろうか。

パウンドの「正しい戦争」は無いという主張は、傾聴に値する。また、パウンドが示したアメリカ軍国主義の拡大と民主主義精神の崩壊への危惧は、昨今、更に強まっている。国際金融資本に関する指摘も正しい。また、利子制度の不健全さ、反倫理性は、歴史的に指摘されてきた。『聖書』に幾つか見られる「利子」の記述で興味深いのが、「外国人には利子を付けて貸してもよいが、同胞には利子を付けて貸してはならない。それは、あなたが入って得る土地で、あなたの神、主があなたの手の働きすべてに祝福を与えられるためである」(「申命記」23章 20-21節)であろう。外国人からは利息を徴収して良いという発想は、民族間の対立を煽るように思えるが、いずれにしろ、利子制度への批判である。アリストテレスの『政治学』でも、高利貸の反摂理性が指摘されている。(アリストテレス)『コーラン』もまた、利息を取ることを禁止する啓示を記す。(『コーラン』93頁)シェイクスピアの『ヴ

エニスの商人』でも、シャイロックの傍白「このおれに、おれの取引に、正当なおれの儲けに、けちをつける、それが利子だと抜かしやがる……」（シェイクスピア25頁）からアントーニオが利子を非難していることが分かる。パウンドの友人で、アメリカ詩の革新に大いに貢献したウィリアム・カーロス・ウィリアムズも、1951年『パタソン』第4巻で、パウンドのひそみに倣って、次の詩句を記す。

貨幣は——ウラニウムだ（鉛になっていきながら）
火を放つ……

……癌、それは利息だ。信用を
流通させよ……銀行のカウンターの
柵を突破して流通させよ（ウィリアムズ322-23頁）

上記のようにさまざまな文献や詩人たちが紀元前から現代まで批判してやまない「利子制度」を、人間のなかに潜む欲望、飽くなき金銭欲、と捉え直せば、果たして、パウンドがすべて間違いだと言いきれるであろうか。
しかし、パウンドは、人道を踏み外している。以下の引用を読んでみよう。

ポグロム（ユダヤ民族虐殺）を始めてはいけない。つまらぬユダヤの民を殺す古い方法はだめだ。そうしたやり方は全くダメだ。もちろん誰かが天才のひらめきによってポグロムを真っ先に開始するとなれば、それを擁護するために何か言わねばならないかもしれない。

しかし、とにかく、合法的な方法が望ましい。この戦争を始めた60人のカイク（＝ユダヤ人の蔑称）を世界防衛の予防策としてセント・ヘレナ島へ送った方が良い。（EPS 115）

確かに、ポグロムに反対している。反対はしているのだが、しかし、根本からポグロムを否定しているようには読めない。ユダヤ民族へかなりの軽蔑をあからさまにしている。また実際、当時のドイツの指導者ヒトラーたちが「天才のひらめき」を示した。したがって、「パウンドは一度も大量殺人やユ

ダヤ差別を擁護したことはない」(Piper)と言う主張は受け入れがたい。「ファシストの弁護、経済理論、反ユダヤ主義、文学的な判断と追憶が混乱したままに混交されたもの」(EPS 427)と見なされるパウンドの主張は、多くの歴史的な事実から、ユダヤ系金融業者が関わった事件を追及し、フランス革命、ロシア11月革命などを上げる。(EPS 207)さらに、パウンドは論理的に矛盾に気付いていないのか、20世紀初頭に現われ、直ぐに、偽書であることが証明された、ユダヤ人による世界制覇を目指すための計画「シオンの賢者の議定書」(Protocols of the Learned Elders of Zion)について、たとえそれが偽書だとしても、「ユダヤ民族はその偽書とともに2400年も生きてきた」と批判する。(EPS 283)

あまりの罵詈雑言に、反ユダヤのためにする反戦の言辞であるのかとさえ思うことがある。

パウンドはまた、枢軸国側の戦争責任を免罪している。たとえば、BBCのアナウンサーが「ここ数年で野蛮な国から成り上がった」と日本を侮蔑したことに対し、1942年1月29日の放送でかなり憤り、中国が孔子の教えを護りきれなかったのに比較して、刀剣や能に代表される日本の伝統文化や歴史を高く評価している。(EPS 26) また、続く2月3日のラジオ放送では、パウンドは、「地上で最も洗練された気質をもつ国民(=日本)を、アメリカ合衆国が、言い難い卑しさで侮辱し、彼らを飢えて威嚇し、包囲して威嚇し、あまりにも卑しいので戦うに値しないとまで言い放った」その結果が、真珠湾であり、アメリカの戦争への介入となったと述べて、連合国による日本攻撃に憤慨する。(EPS 30)

アメリカ参戦を批判するパウンドは、その論拠を伝統的な不干渉主義、モンロー主義、孤立主義に置くが、既にパウンドの時代からそうした態度は許されていない。孤立でも参戦でもなくて、世界との「正しい関わり」、「大義ある友情関係」がアメリカ合衆国には求められている。

1945年4月、パウンドが逮捕され、ピサの米軍収容所に監禁される。鉄格子の檻である上に、吹きさらしであった。その後、母国アメリカへ送還される。パウンドは、おのれの主張を反省したのだろうか。おそらく、反省していないであろう。『ピサ詩篇』の冒頭を始めとして、さまざまなところにムッソリーニへの賛美が見える。

農夫の曲がった肩にひそむ夢の桁はずれた悲劇――

ああ、マニは日に晒され詰め物をされた

そしてミラノでムッソリーニとクララも

ミラノで踵から吊るされた

死んだ雄牛を蛆虫どもがむさぼるために。 (『ピサ詩篇』 1頁)

「わたしはイタリアの再生を信じる」 もしそれが不可能だとしても

(『ピサ詩篇』 35頁)

アレッサンドロ万歳

フェルナンド万歳、それにムッソリーニ

ピエール、ヴィドカン

アンリオットも (『ピサ詩篇』 228頁)

アレッサンドロは、ムッソリーニとともにミラノで逆さ吊りにされた元閣僚であり、フェルナンドはたぶんファシスト系のイタリア人ジャーナリスト。ヴィドカンやアンリオットは、ヴィシー政権の首相や閣僚たちだ。

パウンドの見抜いたことの全てが正しいわけではない。また、「高利貸」および「高利貸制度」にのみ戦争の原因を帰するわけには行くまい。たとえば、人間の本能と暴力や戦争は関係するのか。個人と個人の争いが国家と国家の争いへと発展してゆくのであろうか。そして、この二つには、何か共通の根本原因があるのであろうか。あるいは、時代によって、原因が変化してゆくのか。アインシュタインは、「人間には本能的な欲求が潜んでいる。憎悪に駆られ、相手を絶滅させようとする欲求が！」(アインシュタイン17頁)と述べ、フロイトは、「法といっても、つきつめればむきだしの暴力にはかならず、「法による支配」を支えていこうとすれば、今日でも暴力が不可欠なのです」(41頁)あるいは、「人間から攻撃的な性質を取り除くことなどできそうにもない！」(49頁)と指摘する。征服欲、権力欲、憎悪、不寛容、恐怖、保身などがさまざまな角度から検討され、ひとつひとつ解決してゆく他ないだろう。

繰り返すが、パウンドの激しい反ユダヤ主義、ムッソリーニとヒトラーへの支持、社会のモデルとしてのファシズム=ナチズムへの傾倒、連合国に戦争責任を一方的に帰する判断などは、許されない。混乱した知性が見逃した

ホロコーストを含め、知らない事実もたくさんあるだろう。だが、そうした無知や矛盾、歴史的な限界を詩人は生きる。

パウンドとは、「壊れた蟻塚から這い出る一匹の蟻」（『ピサ詩篇』68）、「レテ川を渡しし者」（『ピサ詩篇』49,96）、すなわち、アメリカを最も愛するがゆえにアメリカに反逆し、地底を這い回る詩人であった。彼の政治的経済的主張や憎悪は、かなり極端だが、その極端さが、美しい作品と詩句を生む。そして、時経るに従い、政治的・経済的な限界が色褪せて、作品そのものが次第に光り輝くのだろう。歴史とは不思議なものだ。

引用文献一覧

アリストテレス『政治学』第1巻第10章。http://www.geocities.jp/hgonzaemon/politics.html#%91%E6%8F%5C%8F%CD. 2006.8.29.

アインシュタイン、ロバート・、ジグムント・フロイト共著『ヒトはなぜ戦争をするのか?——アインシュタインとフロイトの往復書簡』浅見昇吾訳。東京：花風社、2000年。

“Ezra Pound and Bollingen Prize Controversy.” http://www.english.upenn.edu/~afilreis/88/pound-bollingen.html. 2006,9,6.

『コーラン』藤本勝次編、東京：中央公論社、1970年。

三宅昭良「光と人種の救済論——エズラ・パウンドとユダヤ人絶滅の思想」『現代思想』1998年8月号：32-63.

三宅昭良「意志の闘技場——エズラ・パウンドとイタリア・ファシズム」『現代思想』1995年6月号：120-145.

Nogami, Hideo. “FMTP: from modernism to postmodernism.”

http://www1.seaple.icc.ne.jp/nogami/epih14.htm. 2006,9,14.

Piper, Michael Collins. “WHAT DID EZRA POUND REALLY SAY?” Dec. 1997 Barnes Review. http://www.barnesreview.org/ezrapound.htm. 2006,8,15.

Pound, Ezra. “Ezra Pound Speaking”-- *Radio Speeches of World War II*. Ed. Prof. Leonard Doob. Westport, Conn.: Greenwood P, 1978. (=EPS)

パウンド、エズラ『大祓』小野正和・岩原康夫訳。東京：書肆山田、2005年。

パウンド、エズラ『エズラ・パウンド詩集』新倉俊一訳。東京：角川書店、

1976年。

パウンド、エズラ『ピサ詩篇』新倉俊一訳。東京：角川書店、2004年。

シェイクスピア、ウィリアム『ヴェニスの商人』福田恆存訳。東京：新潮文庫、1967年。

“Sir David Sassoon.” Mumbai Pages. <http://theory.tifr.res.in/bombay/persons/david-sassoon.html>. 2006,9,14.

『聖書』新共同訳。東京：日本聖書協会、1995年。

田中宇「ホロコーストをめぐる戦い」<http://tanakanews.com/f1220holocaust.htm>. 2006,9,17.

トクヴィル、A『アメリカの民主政治』井伊玄太郎訳、上下2巻。東京：講談社学術文庫、1987年。

ウィリアムズ、ウィリアム・カーロス・『パタソン』沢崎順之助訳。東京：思潮社、1994年。

ホイットマン、ウォルト『草の葉』上中下3巻。杉木喬、鍋島能弘、酒本雅之訳。東京：岩波文庫、1976年。

ホイットマン、ウォルト『民主主義展望』志賀勝訳。東京：岩波文庫、1976年。

『ウィキペディア』<http://ja.wikipedia.org/wiki/ロスチャイルド>、2006,9,14.

Wikipedia. http://en.wikipedia.org/wiki/Social_Credit, C._H._Douglas, David_Sassoon. 2006,9,14.

“Worst Best.” In the Feb. 15, 1943 issue of *TIME* magazine,

<http://www.time.com/time/magazine/article/0,9171,774273,00.html>, 2006,9,10.

Ezra Pound, or an Anti-War Poet Who Loved and Hated America

WATANABE Shinji

It may sound strange to regard Ezra Pound, the greatest and yet most controversial poet in the 20th century, as an anti-war poet because his political and economic arguments are almost all illogical, unrealistic, prejudiced, and/or without evidence and because they have been ignored and disdained. The crucial point is that, as his poetry is supported by and strongly related to those arguments, we face a dilemma as to how we should appreciate his poetry.

This report, mainly quoting from "*Ezra Pound Speaking*"-- *Radio Speeches of World War II* (1978) and *Pisan Cantos* (1948):

- (1) articulates his main points in regard to World War II and America's entry into it, and shows that he was against both;
- (2) examines his points in regard to the causes of the war and evaluates his arguments against big money, Semitism, the usury-system, and media-control by the United States government;
- (3) suggests that poetry transcends the limits of history and personal, prejudiced arguments.

Of course, this report doesn't support Pound's anti-Semitism, his political support of Mussolini and Hitler, Fascism and Nazism, or his arguments accusing only the Allied Forces.

It really hopes, after demonstrating that Pound was a kind of anti-war poet, to hint at the ideal of democracy to which the United States should now return.